

歴史神学者ユスト・ゴンザレスがキリスト教神学思想を三つの類型にまとめ、西方教会が類型Aと類型Bの間を揺れ動いて発展してきた経過を見事に描いている。この類型論に照らし合わせると。キリストの十字架の理解も、はじめから多様であったことが分かる。類型Aは、アンセルムス（一〇三三／四—一一〇九）に代表されるような罪の赦しの贖罪論が含まれ、類型Bは、真理の啓示者であり、教師イエスが強調される。そのイエスの十字架とは、「十字架の死にいたるまで」真理に従順でありつづけた模範者である。裁きの神から愛と赦しの神に出会っていくルターの信仰義認を知るものにとつて、ルターの十字架の神学もまた、類型Aに色濃く影響を受けていることが分かる。罪は負債であり、われわれが受けるべき罰を神のみ子は引き受け、償うのである。しかしながら、ルターの十字架理解はこれだけではない。ゴンザレスは、これらの西方教会に優勢であった十字架の理解と異なる思想の脈絡を見ていた。それが類型Cである。

初代教会の系譜でいうならば、類型Cは、エイレナイオス（二三〇—二〇〇）に原型がみられる（ちなみに、類型Aはテルトゥリアヌス（二五〇／一六〇—二〇〇）、類型Bはアレクサンドリアのオリゲネス（一八五—二五四）などの教父が考えられている）。類型Aは過去の人類の罪の負債を清算し、類型Bは無知という罪を啓発し、真理へと導く道徳の教師イエスを指し示す。しかし、類型Cは、罪の縄目に囚われた人間を解放するイエスにそのメシア的な救いの業を見る。人間は神の栄光を傷つける反逆

者（類型A）や真理を悟ることのできない無知な人間（類型B）というよりもむしろ、悪魔的な諸力に抗うこともできずに、死の力に隷属している存在である。イエスは、この悪魔的な諸力を十字架と復活を通して、粉碎し、勝利する（G・アウレン）。そして「新しいアダム」として人類の「初穂」となられ、罪人を罪の縄目から解き放ち、その復活の勝利へと導かんとする。類型Cの神学的キーワードは、類型Aの「法—義」、類型Bの「真理」に対し、「歴史」である。先ほどの各類型の代表的教父たちと比較しても、エイレナイオスが牧会者であったことは深い関連があるかもしれない。その救済観は、歴史的であり、また魂の救いというよりも、身体全体の救いを含んでおり、しかも終末的完成に向かった救済史の展望を開いている。ゴンザレスは、類型Cが、どんなに西方教会において「かぼそい」伝統の系譜であつても、それは途絶えずにルターが捉えていることに注目する。二〇世紀初頭にはルター派ルンド学派が「勝利者キリスト」を表したのは、類型Cの再復興ということになる。この類型Cの再復興は、ルター派ルンド学派にのみ帰せられるものではない。その他に、カール・バルトの神学、第二ヴァチカン公会議の典礼刷新運動、そして解放の神学にも見られ、二〇世紀は類型Cの再復興の世紀であつたとゴンザレスは述べている。著者のルター神学から受け継ぎ、しかも彼の十字架の神学から真正面に、ミッシオ・デイを考へ抜いた宣教論は、類型Cの神学思想に合致する。それ故に、この十字架の神学には、ルター神学に思想的源流を見ることができると同時にエキクメニカルな視野と神学的な開放性が見られる。

ドイツの神学者ドロテー・ゼレ(一九二九—二〇〇三)——しばしば *Sodke* と英語では表記されている——は、最も興味深い二〇世紀の神学者の一人と広く見なされている。ゼレは、フェミニスト神学、解放の神学、政治神学における際立った関心によって、母国ドイツにおいても、また支持を受けたアメリカ合衆国においても影響力を持った。著書『苦難』(一九七五年)では、ゼレが不適切な苦難のキリスト教理解と見なすものを取り除き、より適切なものを据えることを試みた。人間の苦難を神の強さの現れ、あるいはキリスト者の召しと見なしてしまうと、二つの基本的な問いに対する適切な答えを提供できなくなる。それらは「苦難の原因は何か、そしてどのようにすればこれらの条件を取り除くことができるか」、そして「苦難の意味は何か、そしてどのような条件下で苦難はわれわれをより人間的にするか」という問いである。学習のために引用したこの箇所は、苦難のシンボルとしての十字架、そして苦難のうちにある人類に対してそれが何を意味しているかということ扱っている。3・21、3・23、3・33、3・38も参照せよ。

奴隷の宗教のシンボルは十字架である。それは奴隷のための懲罰的な死である。この苦しみ、挫折、死のシンボルがキリスト教の中心点に立つことが必要であろうか。神学および敬虔における十字架の過度の強調のために、「悲惨さを正当化する神」が社会において過去に、そして現在、礼拝されていないであろうか。ウルリッ

ヒ・ヘディングーは「古代とキリスト教の同盟」を攻撃するのだが、それはそのうちに「過酷な運命を支配する、あるいは過酷な運命によって支配する至高の摂理」という根本教理を見るゆえである。そして、服従へのいかなる勧めをも徹底的に拒絶した。十字架は、悲惨さを取り除き、メシア的に理解された神学の中心にされることはできない。イエスの死は、何よりもまず宗教政治的そして政治的殺人である。そして愛は、「イエスの救いの愛でさえ、真正であるために、十字架による殺人を要するものではない」。これに関連してヘディングーは、パラドックス——苦難に満ちた現実の未解決な矛盾——を中心的な神学的範疇へと持ち上げる神学的思考を批判する。「絶対的な意味において神がパラドックスである場、そこに神は愛と悲惨さの間の区別を曖昧にされる」。

しかし、愛が真正であるために十字架を必要とするかどうかという問いは、正しく立てられていないように私には見える。この問いとの関連で、ヘディングーは十字架を「懲罰的の死の基本原則として」、「つまり苦難を定める最後にアブラハムの犠牲を完成する機会を得る神という視点から理解するか、あるいは十字架を見る時に人々が自分自身の苦しみと死として受け取る「死の慰めの神秘主義」として受け取るかのどちらかである。しかし十字架は、父なる神と御子の関係を表すシンボルでもなく、自らの愛を自分で納得するために苦難を必要とするマゾヒズムのシンボルでもない。十字架は何よりも現実性のシンボルである。愛は十字架を「要求」はしない。しかし事実上、愛は十字架に至るのである。事実上、ナザレのイエスは十字架にかけられた。事実上、スパルタクスの指導のもとで反乱を起こした奴隷たちの十字架は、ローマ帝国の通りを飾った。十字架は決して神学的発明ではなく、何千という解放の試みに対する世の答えなのである。このゆえにこそ、われわれは、十字架上のイエスの死において自らを認識できるのである。われわれは、支配的秩序を支えている支配者のイデオロギーに気づく。われわれは、命令に従って手を下した兵士たちの残忍性とサディズムを見る。われわれは、イエスの友人たちの行動を突きつけられる。これらすべては、傷ついた者に対するわれわれの行動の可能性なのである。そして

われわれ自身が苦惱に打ちひしがれる時、その時われわれはイエスの物語から学ぶことができる。愛はその実現のために十字架を必要とするかという問いは、単に推論的関心から出ているのであり、実存的関心からではない。もしその光の中で神について考えるなら、神の栄光、輝き、その啓示された榮譽、至福は、生命の破壊や損傷という恐るべきパラドックスを「必要」とはしない。しかし事実上、愛は十字架へと至り、目に見える現実において神は逆説的に行動することを選ばれるのである。

【解説】

この箇所においてゼレは、苦難の意味を探索して、ドイツ人の著作家ウルリッヒ・ヘディングガーを論じている。ゼレは、ある種の理論的解釈を提供することによって、苦難の「神秘さを解く」ことが可能ではあるが、この「推論」は、十字架の実存的重要性と比較して限られた重要性しかないと論じる。十字架は、あらゆる側面と状況における生の肯定を表している。苦難の現実が肯定されるが、一方で同時にそれは信仰者とのキリストの受肉的一致のために人間らしくされる。

【研究のための問い】

- 1 ゼレが苦痛の不適切な理解を表していると考え二つの立場を述べよ。
- 2 「愛は十字架を『要求』はしない。しかし事実上、愛は十字架に至るのである」。ゼレはどこで何を言いたいのか。